



289号
2023/12

日中文化交流市民サークル'わんりい'
〒195-0055 町田市三輪緑山 2-18-19
寺西方 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



庭先で盛装の準備：長い髪を整えるうら若い女性は、6月号の表紙を飾った娘さんです。ギャロン・チベット族の女性の民族衣装の基調色は黒で、100年以上前の英国王立地理学会誌にも記録されています。背景の尖峰は四姑娘山主峰 6250mの南壁。
(四川省小金県、撮影 2000 年 12 月：四姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川健三)

'わんりい' 2023 年 12 月号の目次は 16 ページにあります

tōu liáng huàn zhù
偷 梁 換 柱

中国で見つけた“有小学校入学準備の為の”絵本から

文と訳・有為楠君代

今月もまた、日本ではなじみのない言葉です。言葉はなじみ薄ですが、この言葉にまつわる史実は、日本でもよく知られています。

・>・>・>・>・>・>

秦王・^{えいせい}嬴政は、戦国時代末期に残った六国をすべて滅ぼして、中国初の統一王朝・秦を興し、自らを始皇帝と称しました。ある時、彼は従者を従え、馬車を連ねて、4回目の国内巡遊に出かけました。

其の巡遊の間に、始皇帝は病に冒されました。彼は宰相の李斯を枕元に呼び、「私が死んだら、太子の扶蘇を皇帝の位につけるように」と言い残して、死去しました。

始皇帝には、息子が二人いました。長男は太子の扶蘇。次男は^{こがい}胡亥と言い、この巡遊に同行していました。始皇帝の身の回りの世話をし、勅命など文書を取り扱う側近は、宦官の^{ちやうこう}趙高で、次男胡亥の養育係も兼務していました。趙高は、扶蘇が皇帝になると、自分の立場が悪くなると思い、胡亥を皇帝にしようと考え、宰相の李斯を取り込んで、始皇帝の勅命を密かにすり替えて、愚昧な胡亥を玉座に押し上げ、二世皇帝にしました。

・>・>・>・>・>・>

言葉の意味:梁=柱の上で横に渡した木材。柱=建物の中心となる木材。偽物を本物とすり替えて騙すことの喩え。

言葉の使い方:彼は、梁を盗んで柱に替えて(偽物と本物をすり替えて)、他人の仕事の成果を横取りして、自分のものとした。

・>・>・>・>・>・>

日本語では、「^{とうりようかんちゅう}偷梁換柱(梁を盗みて、柱に換う)」と言い、「兵法三十六計」の25番目の戦術だそうです。

す。「兵法三十六計(中国名「三十六計」)」は、南北朝時代、南朝宋の將軍・^{だんどうせい}檀道濟が著した書物で、その25番目の策略は、兵力が劣勢の時、密かに本質をすり替えて、敵の弱体化を図る戦法だそうです。

始皇帝が巡遊の途中で亡くなった時、皇帝がまだ



挿絵：満柏画伯

生きているように装って、遺骸を馬車に載せて、死臭をごまかすために魚を積んだ馬車を一緒に走らせて、宮殿に帰ったのは有名な話ですね。宮殿に帰ってから、皇帝の死去を公にして、宦官の趙高が宰相の李斯や胡亥と諮って、始皇帝の遺言を改ざんして、太子・扶蘇を自殺に追いやり、胡亥を二世皇帝として擁立しました。胡亥は暗愚で、趙高の思いのままに操られ、趙高は国を治める才覚が無

く、秦は建国後僅か15年で滅亡しました。

どうしてこのお話が、第25計の実施例として語られるかということ、始皇帝の遺言をすり替えて秦を滅ぼした宦官・趙高は、秦によって滅ぼされた趙の王族で、遺言をすり替えることにより、祖国趙の敵を取るのに成功したのだと言い伝えられているからなのだそうです。

因みに、このお話には、別の面白い一面があります。始皇帝が中国を統一して間もなく、「秦を滅ぼすものは胡(西方と北方に住む異民族)である」との占いが出た、と噂になり、それを信じた始皇帝は、万里の長城を整備して、西方の守りを固めるのに力を入れ、太子の扶蘇を西方に派遣したのもそのためだと言われています。

しかし秦が滅亡した後に、人々は、占いで言われた「胡」とは、異民族の胡ではなくて、次男の胡亥のことだったのだと知ることになり、改めて、占いの正しさを認識した、というものです。

てんこうしん
李清照『点絳唇』(寂寞深閨)

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

前にも取りあげたことがあると思いますが、李清照(1084~1155)は中国を代表する女性詩人です。

〈詞〉を得意とし、これまで多くの人々に愛誦されてきました。今回取り上げるのは〔点絳唇〕です。李清照は北宋王朝の滅亡、一家離散、最愛の伴侶超明誠の早世等々、波乱万丈の世を生き抜いた詩人です。今回の作品は夫が左遷され、離別を余儀なくされた後のやるせない思いを綴ったものです。切切と胸に迫る抒情の世界を味わってみましょう。

diǎn jiàng chún
〔点絳唇〕

jì mò shēn guī
(寂寞深閨)

lǐ qīng zhào
李 清 照

jì mò shēn guī
寂 寞 深 閨

róu cháng yī cùn chóu qiān lǚ
柔 腸 一 寸 愁 千 縷

xī chūn chūn qù
惜 春 春 去

jǐ diǎn cuī huā yǔ
几 点 催 花 雨

yǐ biàn lán gān
倚 遍 栏 干

zhǐ shì wú qíng xù
只 是 无 情 绪

rén hé chù
人 何 处

lián tiān shuāi cǎo
连 天 衰 草

wàng duàn guī lái lù
望 断 归 来 路

- * 点絳唇=口紅をつけること。但しこれは楽曲の名称であって歌詞の内容を表わすものではない。
- * 深閨=女性の寝室。家の奥深い所にあるので深閨という。
- * 柔腸一寸愁千縷=様々な思いに悩まされ、心が千々に乱れること。中国では、腸は愁いを宿す所とされる。

* 催花雨=花の盛衰を促す雨。

* 倚遍栏干=何度も欄干の手すりにもたれ、夫の帰りを待つこと。

* 望断=遠くのをいつまでも眺めやること。

〔訓読〕

てんこうしん
〔点絳唇〕

(寂寞深閨)

しんけい
寂寞たり深閨

じゅうちよういっすん せんる
柔腸一寸愁い千縷

春を惜しむも春は去り

いくてん さいか
幾点か催花の雨

らんかん よ あまね
欄干に寄りて遍くするも

だ じょうしよ
只だ是れ情緒なく

いづく
人は何処に

すいそう
天に連なる衰草に

きらい みち ぼうだん
帰来の路を望断す

〔和訳〕

わび ねや
侘しき閨に傷心の

思いや千々に乱れける

春を惜しめど春去り逝きて

したた
落花促す雨ぞ滴る

らんかん
欄干に寄り尽くす日々

あじき
ただ味気なく

いづく
彼人は今や何処に

すいそう
天に連なる衰草の

当てなき帰路をただ望み見る

開封・菊花文化節

文と写真＝村上直樹

去る10月27日0時10分、中国国務院前総理・李克強氏が上海で急逝した。享年68歳。1955年7月3日に安徽省合肥に生まれた李前総理は中央政界で頭角を現わす以前、1998年6月から遼寧省に転任する2004年12月まで河南省の共産党委員会と行政機関で要職を歴任しており、河南省（中原）とはとくに縁が深い。

11月2日付で新華社北京が発信した「李克強同志生平」でも全5,157字のうち289字を費やして河南省での功績を讃えている。その記述は「1998年6月起、李克強同志歴任河南省委副書記、代省長、省長、省委書記、省長、省委書記、省人大常務委主任、…」で始まる（役職が重複して出ているが、これは再任されたことを記録しているようだ）。つづいて「他提出實現中原崛起的奮闘目標，在全省上下形成發展共識。」（彼は中原崛起という奮闘目標の實現を提起し、全省に亘って發展の共通認識を形成した。）とある。

逝去の報が世界中を駆け巡った同じ日の午後4:48には『豫記』に「克強同志，河南人民感謝您！」と題する喻新安・河南中原創新發展研究院院長の文章が掲載された。一瞬、突然のことなのに早すぎるのでは、と奇妙に感じたが、これは今年の3月李克強氏が10年間務めた国務院総理を退任した際、喻新安氏が3月5日に「克強同志是中原崛起的奠基者之一」（克強同志は中原崛起の基礎を定めた一人）と題して『頂端新聞』に発表した文章を追悼の意を込めて再掲したものであった。元の文章は「克強同志，您辛苦了！」で結ばれている。

日を置いた10月30日付の『頂端新聞』には喻新安氏が改めて「他在河南七載，对中原崛起做出了八大貢獻」（彼は河南での7年間で中原崛起に対して8つの大きな貢獻をした）と題する追悼記事を書いている。やはり中原崛起がキーワードである。この「雑感」でも2003年3月14日付『人民日報（北京版）』に北京で開催中の全人代に河南省代表として参加していた当時の李克強河南省委書記に対するインタビュー記事「埋頭苦幹實現中原崛起」（中原崛起の實現に一所懸命取り組む）が掲載されていることを紹介した（2021年4月号）。

ところで、新華社発の「李克強同志生平」には12

枚の写真がつけられているが、その中に李前総理が2003年8月8日に河南省新郷市を視察した際、地元農村の住民と一緒に撮ったものがある。李前総理の遺志で選んだ1枚とは考えにくいだが、そこに写る屈託のない明るい笑顔は43歳からの7年間で過ごした河南時代への本人の想いを表しているかのようである。

さて、ここからは標題に即した話題に移る。10月18日から11月18日の1か月間、河南省の開封市では恒例の菊祭り「菊花文化節」が開催された。41回目（第41届）である。開封の菊祭りについてはこの「雑感」でも、岳飛の背中に母親が「精忠報国」の入れ墨を彫った「岳母刺字」に関連して2020年12月号で、また、菊で造られた孫文の生家を紹介した2022年5月号の過去2回ほど取り上げた。

2023年10月17日付『豫記』「連続40年重複一件事、開封为啥要辦菊花節？」（40年連続で一つのことを繰り返している、開封はなぜ菊祭りを開催するのか？）によると開封の菊祭りについて過去3度の節目があった。まず、1983年に開封市が菊を市の花に指定し、毎年「菊花花会」を開催すると規定した。その後2000年には「開封菊花文化節」として省級の祭典（節会）に格上げされ、毎年10月18日に開幕することが定められた。さらに、2013年には国家級の祭典に格上げされ今日に至っている。期間中は主会場の龍亭公園ほか複数の特定会場のみならず市内の至る所に豪華な菊が飾られ、全市を挙げての一大イベントとなっている。新型コロナの下では例年通りとはいかなかったと思われるが、昨年2022年の第40期については現場とオンラインに分けた方式がとられ、開会式は11月1日に延期されたそうである（2022年10月18日付『正觀新聞』）。

今年のテーマは「宋韻開封・菊香中国」（宋の調べ開封、菊の香り中国）であり、例年にも増してこの祭典の歴史文化的意義を強調している。なお、脇に逸れるが、宋韻と聞くと最近思い浮かぶのは浙江衛視（衛星放送）で宋韻文化を現代に伝え広めるバーチャルヒューマン・谷小雨さんのことかもしれない。谷さんが扱うのは江南から浙江の南宋文化である。

北宋の都であった開封は当時、世界最大級の都市

であり、すでに菊を愛でる習慣があつて大規模な菊祭りも開催されていたらしい。その後開封は多くの戦火や災害に見舞われ苦難の道を歩んだが、なお、文化遺産都市として誇らしげに立ち続けている。一方、菊は梅・蘭・竹とともに「花中四君子」と称され、寒さに耐え霜にも強く、剛健な性格、高潔な気質の象徴とされてきた。そこに両者の共通点が見いだされるのだという。

この菊祭りを私は過去 3 回ほど見に行ったほか、テーマパーク・清明上河園で挙行される絢爛豪華な開幕式の実況を地元のテレビで観たことがある。初めて見に行ったのは 2010 年 11 月 17 日。まず、「中国開封第 28 届菊花花会」と書かれた横幕の張られた主会場・龍亭公園の入り口前の広場で宋代風の儀式による歓迎を受ける。会場内には菊で飾り造られたモニュメントが多数出展されていた。この年の一番の作品は菊で造られた「清明上河図」でなかったかと思う。これは菊の花を中心とした、長さ 33.2 メートル、幅 1.6 メートルの巨大な盆栽であり、数十万本の菊が使われていた。300 軒近い家屋のほか、荷車、馬、籠、船なども再現されており、感心させられた（「清明上河図」そのものは「雑感」第 1 回 2020 年 4 月号でも紹介した）。

2 度目は 2012 年 11 月 4 日の第 30 届である。写真は龍亭公園の入り口を進んだところである。遠くに高さ 26.7 メートルの龍亭大殿が見える。72 段の石段を含むそこまでの沿道も菊で埋め尽くされている。当日は風が強く冷たかったものの、快晴で菊が満開に近く日曜日でもあったため多くの見物客で賑わっていた。

この 2012 年には、はじめて会徽（シンボルマーク）と吉祥物（イメージキャラクター）が制定された（写真参照）。シンボルマークは花びらによる「开」（開



菊祭りの会場「龍亭公園」(2012年11月)

と「文」の字が組み合わされて人々が手と手をつなぐ様子を表している。それは対外開放をし、重厚な文化伝統を継承するという開封市の決意を示している。吉祥物のほうは「菊娃」と「菊妮」の一对からなり、朱仙鎮年画（「雑感」2023 年 7 月号参照）の「招财童子」がモデルである（2012 年 9 月 14 日付『開封日報』による）。

3 回目の直近最後に行ったのは 2014 年 11 月 9 日の第 32 届である。この日は過去 2 回と同様、主会場の龍亭公園に入り、龍亭大殿に登り下りた後、はじめて「宋煌官瓷芸術館」という看板の掛かった建物を覗いてみた。中は芸術館というより作業場の様であ



菊祭りの会徽と吉祥物
(百度百科より)

った。はじめは体験コーナーかと思ったが、すぐ、とても素人には真似ごとすらできない精巧な菊を模った磁器が製作されていることに気が付いた。なお、インターネットで調べると「開封宋煌官瓷芸術博物館」という名称の施設が 2014 年 7 月 15 日に開封市内の別の場所で開館したそうである。二つの館の間に何か関係があるのかもしれない。

＊・＊・＊・＊・＊・＊・＊

旧聞に属するが、新型コロナ禍以降、中国への出入国の際に課されていたオンラインでの健康申告（「中華人民共和国出/入境健康申明卡」への記入）が 11 月 1 日午前 0 時をもって不要となった。ビザ取得・円安・燃料原油高と中国旅行（海外旅行）の三重苦が続く中で、少しでもありがたいことである。



菊で造られた「清明上河図」(2010年11月)

古代中国の風流逸話 – 世説新語 – (2)

顧 傑

前回から、「世説新語」の話を紹介しています。

一般人向けの書籍として、「人々に公序良俗を教える」という役割があったと思われませんが、ここでは、原文と内容解説だけではなく、一部の語句や人物の説明など、歴史や由来も交えて、お話していきたいと思えます。

第一巻の最初は「徳」編ですが、「立派な人物になるためには、まず徳のある行為」が大事であるということだと思えます。

陈仲举言为士则，行为世范，登车揽辔，有澄清天下之志。为豫章太守，至，便问徐孺子所在，欲先看之。主簿白：“群情欲府君先入廨。”陈曰：“武王式商容之间，席不暇暖。吾之礼贤，有何不可？”

訳文：陳仲挙が初めて手綱を握って、官吏として最初の任地に赴いたとき、その心には世の中を良くしたいという志があった。彼は総督として豫章に赴き、目的地に着くやいなや、周囲の人々に「徐稚はどこにいるのか？」と尋ねた。事務を担当する役人はこう答えた。「民衆は、まず役所に来てほしいと言っています」。すると陳は「周の武王が殷商に勝利したばかりの時、休む間もなくすぐに聖人の商榮を訪ねて行った。賢者に対して敬意を払うのは当然のことだ」と返答した。

解説：陳仲挙は、東漢の桓帝の時代の名臣で、太尉を務めた。漢の靈帝の時代、外戚と共謀して宦官を駆逐しようとしたが、それが露見して殺された。

徐稚は豫章南昌出身。東漢時代の有名な学者で、

「南州の高師」と呼ばれた。朝廷や地方政府に何度も招聘されたが、最後まで政府には仕えなかった。

東漢時代の有名な大臣である陳仲挙は、その言動において国の模範となっていた。

周の武王と殷商の話が出てくるが、この殷商とはつまり「封神演義」によく出て来る商紂王のことで、「商」というのは紂王の苗字である。つまり、残忍な紂王を倒した周の武王は、前朝王族の人にもかわらず徳のある者を選び、能力のある者を登用したことを引き合いに出している。ここでは、陳も周武王と同じく、「どんな人でも徳と才能さえあれば会いたい」という人徳ぶりを物語っているのだ。

周子居常云：“吾时月不见黄叔度，则鄙吝之心已复生矣。”



曹操の軍師「荀彧」の肖像
(ネット記事『奸雄の知恵袋』より)

親皇荀文若
大觀名齊
業震三台
家風望遠
荀彧

訳文：東漢の周子居はよくこう言った。「黄憲(黄叔度)にしばらく会わなければ、私の心の中の貪欲さと卑屈さがまた大きくなっていく」
解説：周子居(生没年不詳)は魯南安城の人。彼は既に登場した陳仲挙の親友で、非常に頭がよく、能力も高かった。黄憲は東漢時代の有名な賢人である。

陳仲挙は「周子居は本当に国を治める人材だ」と常々、感慨深げに語っていたといわれる。

郭林宗至汝南，造袁奉高，车不停轨，鸾不辍轭；诣黄叔度，乃弥日信宿。人问其故，林宗曰：“叔度汪汪如万顷之陂，澄之不清，扰之不浊。其器深广，难测量也。”

注：车不停轨，鸾不辍轭：轨(guǐ)は車軸の両端、ここで

は車輪を指す。鸾(luán)、車を飾る鐘、ここでは車を指す。輶(è)、動物の首にある曲木。車が停車しないことを指し、ここでは短時間下車することを表す。

訳文: 郭林宗が汝南郡(地名)に到着した時、彼は袁奉高を訪ねて行ったが、あまり長居しないで帰った。その後、彼は黄叔度を訪ねて行ったが、何日も滞在した。その訳を他の人に尋ねられたところ、郭は「黄叔度の人柄、気質の広さは大きな湖のようで、広くて深だけでなく、外部からは干渉されずに、水が澄んでいて穏やかで、かき混ぜることができない。その深さと広さは、計り知れないだろう!」と答えた。

解説: 郭林宗と袁奉高はともに後漢の名士であり、儒者であった。

李元礼风格秀整，高自标持，欲以天下名教是非为己任。后进之士，有升其堂者，皆以为登龙门。

訳文: 李元礼は気品と高潔さを備えた人物であり、自分自身にとっても厳しく、世の中の礼儀作法や善悪の規範を自分の責任とみなしていた。彼を尊敬する後世の人々は多く、彼の教えを聞く幸運に恵まれた人々は、自分が登竜門に上ったように感じた。

解説: 李元礼は東漢末期の有名な学者。太尉李修の孫、趙国の大臣李益の子であった。

陈太丘诣荀朗陵，贫俭无仆役，乃使元方将车，季方持杖后从。长文尚小，载著车中。既至，荀使叔慈应门，慈明行酒，余六龙下食，文若亦小，坐著膝前。

(太丘县长陈寔去拜访朗陵侯相荀淑，因为安贫乐道生活节俭，他没有仆役侍候，就让长子陈纪驾车送他，让第四子陈湛拿着手杖跟在车后。孙子陈群年纪还小，就坐在车上。) 于时太史奏：“真人东行。到了荀家，荀淑让荀靖迎接客人，让荀爽斟酒，其他六个儿子上菜。孙子荀彧年纪尚小，就坐在了荀淑膝上。当时太史观天象后，启奏朝廷说“有真人往东去了”。

訳文: () 内の漢文の内容も総合して、訳文として示した。

ある時、太丘の知事であった陳寔が、朗陵の知事であった荀淑を訪ねて行った。貧しく質素に暮らしていたので、使用人も置かなかったため、長男元方(長男陳紀の字)を御者とし、四男季方(四男陳湛の字)を従者として出かけた。孫の陳群(字は長文)はまだ幼く、車に座っていた。その時、太史(占いなどをする官僚)は「真人(徳を備えたひと)が東に向かっている」と奏上した。

訪問先の家につくと、こちらにも使用人は少なく、荀淑は三男荀靖に客を迎えさせ、六男荀爽に酒を注がせ、他の6人の息子たちに料理を運ばせた。孫の荀彧はまだ幼く、荀淑の膝の上に座っていた。

その時、太史(占いなどをする官僚)は天の兆しを観察した後、宮廷に「東の方へ出かけた真人がいる」と奏上した。

解説: 陳寔の号は仲弓。かつて太丘の長を務めた頃の施政が民衆の心をつかんだことから、後世「陳太丘」と呼ばれるようになった。死後、3万人もの人々が弔問に訪れた。

荀淑: 朗陵の知事を担任したことがあるから、荀朗陵と呼ばれている。

季方は陳寔の四男である陳湛。父、兄とともに「三君」と呼ばれた。

長文は陳寔の孫、陳紀の息子、陳群。三国時代の曹魏の要臣。

慈明は荀淑の四男の荀爽の号。東漢末年の大臣、経済学の大家。

荀淑は息子を8人持っており、いずれも有能な名士であった。兄弟は合せて「八龍」と呼ばれていたので、「余(残りの)六龍」とは、荀儉、荀緄、荀燾、荀汪、荀肅、荀勇を指す。

荀彧: 荀淑の孫荀群、字は文若。後漢末の名政治家・戦略家。曹操の北方統一の参謀であり、曹操から「我が子房(張良)」(張良が劉邦にとっての良き参謀であったのと同様、曹操にとっての重要な参謀)と呼ばれた。

~~~~~

陳家と荀家はともに徳と才能を兼ね備えた名門で、傑出した人物を数多く輩出しています。ここでは作者が「徳」と「才」は関連しており、金銭と権力はいくまで「徳」と「才」があつてから付随するとしているのです

## 「秦皇島」から「承德」へ

### 「避暑山荘・外八廟」駆け足旅行(8)

文と写真 吉光 清

「須弥福壽之廟」は「班禪6世」をチベットから迎えるために、乾隆帝が造営したものだという。

ウィキペディアによれば、「班禪」すなわち、「パンチェン・ラマ」とは、「偉大な学匠」を意味する合成語で、現代チベット語では「パンチェン・ラマ」は「ペンチェン・リンポチェ」または「タシ・ラマ(タシルンポ寺の座主)」と呼ばれる。

「阿弥陀如来」の化身とされ、ダライ・ラマに次ぐ高貴な転生であって、チベット第二の都市シガツェのタシルンポ寺を本拠にした、チベット仏教ゲルク派の大ラマである。

ダライ・ラマは「観音菩薩」の転生として、チベット第一の都市ラサにあるセラ寺、デブン寺の座主職を兼ねていた、1642年、ダライ・ラマ5世の時に、モンゴルの豪族グーシ・ハーンがチベットの大部分を制圧し、中央チベットをダライ・ラマ領に差し出したので、モンゴル人や満州人に宗教的な権威者として影響力を持つことに加えて、チベットを統治する「ガンデンポタン(=チベット政府)」の盟主として政治権力も持つことになった。

ダライ・ラマとパンチェン・ラマはゲルク派における2大ラマとして、「太陽と月」に準えられ、いずれ劣らぬ宗教的権威であった。

資料によれば、2大ラマは互いに、次の転生者を選ばれ、成人するまでの空白を補う「副法王」としての役割を果たし、相互に師弟関係を持つようになっていた。乾隆帝に招かれた「パンチェン4世(=6世:代数の数え方が異なる)」は22歳のダライ・ラマ8世の師になっていたが、ラサにあるガンデンポタンに関わることはなかった。

#### ■大紅台の屋上に頭を出した「妙高庄严殿」

大紅台を遠くから見た時は、同じ造りの二つの建物が横に連なっているかと思ったが、近くに来て見ると、左側の建物は3階建てだが、右側の建物は2階建てで独立していた。高い方が大紅台、低い方は東紅

台というらしく、その間を通過して奥に抜けられる通路もあった。

東紅台の建物内の階段を登り、屋上に着いた。大紅台の屋上は一段高い所にあった。

こちらの屋上から、向こうの屋上を見ると、大紅台の中央部分から「妙高庄严殿」の二層の屋根が頭を出していた(全体は地上高30メートル近く)。周囲に大勢の参観者が見物している様子が見えた。

妙高庄严殿の第一の特徴は、塗金された鱗瓦や琉波状の塗金瓦などに、金が潤沢に使われているところである(須弥福壽寺の殿楼全体で、1万5千4百29両8銭5分4厘の金を使用されたという)。普陀宗乘之廟の『万法归一殿』に匹敵するきらびやかさで、皇帝が居住する宮殿の格式ということらしい。

しかし、『万法归一殿』との最も大きな違いは、屋根の棟上に「走獣」ではなく、躍動する龍の飾り物が見られたことである。正四角錐の形の屋根の棟線に、頂点の宝塔に向かう龍が2頭と逆向きに屋根の端から虚空に飛び出しそうな龍が2頭見えていた。屋根の大きさと比較して、アンバランスな巨大さであり、奇観ともいふべき姿に度肝を抜かれた。

#### ■圧巻だった屋根上の装飾

天上から降りてきたと見える龍の眼前には、球形の飾りが置かれている。日本画などでもお馴染みの、



大紅台の屋上に頭を出した「妙高庄严殿」





「宝珠」と屋根の端に向かう龍 長い鼻を伸ばす象らしき飾り

「天翔る龍」が前脚の爪で掴んでいる「龍の玉」（「如意宝珠」と言い、すなわち7つ揃えられれば、何でも願いが叶うという“ドラゴンボール”）に違いない。

大紅台の屋上に移り、「妙高庄严殿」の周囲を一巡しながら見ると、屋根の上には4匹の龍が宝塔を目指して駆け上り、4匹の龍が宝珠と共に地上に向かっての姿があった。単なる装飾上の趣向なのか何かの寓意なのか、筆者には分からなかった。

中国の歴代王朝では、「龍」は皇帝の象徴とされてきたが、掴んでいる「宝珠」はサンスクリット語に起源を持つようであり、この宮殿の屋根に採用されたのは、皇帝の威厳を示すだけではなく、パンチェン・ラマを迎えるうえで、仏教的に何らかの意味があったのかも知れない。

これら伽藍全体の造営を僅か1年ほどで完成させたこと、そして隅々まで技術の粋を尽くした華麗な建築物を見ると、清朝の財力と技術力の高さを思い知らされる。それにしても、重機が無い時代に、1頭当たり1トンにもなる金銅造りの龍を8頭も、一体、どうやって屋根上に載せたのだろうか？

ひとつ下の層の屋根の四隅に取り付けられた装飾が、これまた目を引いた。斜め上の空中に向かって鼻を長く伸ばした動物の頭だった。長い鼻からはやはり象しか考えられない。このような屋根飾りが中国



こちらの大紅台から見た「晋陀宗乘之庙」の大紅台

内の他の殿楼でも見られるとは思えない。チベットでは普通に見られるのだろうか？

### ■大紅台の屋上から

大紅台の屋上から西方を見ると、晋陀宗乘之庙の大紅台が目に入ってきた。高台の上に立つ、堂々たる姿が印象的であった。視線を近くに転じると、西北方向に延びた通路の先に、二層の屋根を持つ楼閣があった。

これが、パンチェン6世の居所として造られたという「吉祥法喜殿」であった。屋根の瓦も飾り物も金色に輝いていた。正面は柱が6本並んだ5間の幅で、奥行きも5間あり、下層の屋根は方形のようだった。しかし、上層の屋根は四角錐の形ではなく、日本の城の天守閣の屋根のような形で、両端にはシャチホコならぬ何か飾られていたが、何なのかは分からなかった。それらの中間地点にはひととき大きな宝塔が建っていた。一層目の屋根の端には、再び、長い鼻を伸ばした象の飾りが見られた。二層目の屋根の端には「龍の玉」と思しき球形の飾りが見えた。

各層の屋根の下にはそれぞれ扁額がかかげられていた（1層目の屋根の下には「芬陀普涌」、2層目には「吉祥法喜」とあったようだ）。

1階部分がパンチェン6世の居所で、2階部分は彼がチベットから持参した多くの仏像、タンカ、お経の巻物などの文物が収められていた仏堂であった。残念ながら、軍閥による戦争のさなかに、それらは悉く略奪に会い、一部は海外に流失したという。

「吉祥法喜殿」から少し離れた奥に、チベット式白台の上に建つ建物があった。パンチェンの弟子たちが居住し、チベットから持参した經典の翻訳にあたった場所だという。その奥に続いているのが「万法宗源殿」である。間口が広い建物の屋根は黄色の琉璃瓦と、屋根の頂の水平を飾る緑の琉璃瓦との対比が鮮やかであった。乾隆帝が揮毫した「万法宗源」の扁額が掲げられていた。「万法宗源殿」内部の庭には「金賀堂」が周囲に抱かれるように建っている。

「万法宗源殿」の奥に、ひととき高く聳えているのは「琉璃宝塔」に違いなかった。（つづく）

資料:

石濱裕美子『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店、2001。

# 日月潭(つづき)

訳：一瀬靖子／大槻一枝

老婆は若夫婦の手を握って、

「長らく人に会っていなかったよ！ 名前は？」

「私たちは川で魚を捕って暮らしている夫婦です。私は大尖哥、妻は水社姐と言います。お婆ちゃん、貴女はどうして、ここにいますか？」

老婆は白髪をかき上げながら、涙を流して自分の境遇を話した。彼女は若いころ近くの山腹に住んでいて、一家は平和に暮らしていた。ある日、彼女が山でサトウ黍畑を耕していると、突然強い風が吹いてきて、二匹の大きな竜が中空に舞い上がり、尻尾で地面ごと巻き込んで、彼女をこの深い谷間の洞窟に連れて来た。毎日、食事の世話をして日を過ごすうちに、彼女の黒髪は真白になり、丸くみずみずしかった顔には皺が寄ってしまったと話し、続けて、

「お若いの、早くここを出なさい。竜は池で遊び飽きると帰って来て食事をします。あなた方を見たら、すぐ一飲みにしてしまうでしょう」

大尖哥は、

「竜は太陽や月を呑んでしまい、人々の生活は苦しくなりました。私たちは悪い竜を退治し、太陽と月を奪い返さなくてはなりません」

老婆は首を傾げ、

「あなた方二人で、どうやって竜を退治するの？でも、私は二匹の竜が、食事をしながら話すのを聞いたことがあります。雌の竜が誇らしげに“私たちは天下無敵よ”という、雄の竜が“阿里山の谷底の金の斧と金の鋏はさみが恐ろしいよ。誰かが金の斧や鋏を池に落としたら、金の斧はすぐ俺たちの頭を割り、金の鋏は俺らののどを突く。そうしたら俺らはおしまいさ”、雌竜が慌てて、“早く行ってそんなものは壊してしましましょう！”、雄は落ち着いて、“大丈夫だよ、それは誰も知らない深い谷底に埋めてあるし、知ったところで、どうやって掘り起こすのか分からない”そんな話でした」

老婆は、

「悪い竜をやっつけ、太陽や月を奪い返そうとする

なら、阿里山麓へ行って、金の斧と金の鋏を掘り出さなければならぬですよ。私は死ぬほど竜が憎らしい。そして私は早く家に帰りたい！」と叫んだ。

大尖哥は、

「お婆ちゃん、私たちはきっと金の斧や金の鋏を掘り出します。そして悪い竜をやっつけ、貴方を迎えに来ますから、気を落とさずに待っていてください」と力づけた。

この時、水社姐の頭をよぎったのは、山を掘るのにはどうしても鋏がいるということだった。

彼女は老婆に、

「鋏があつたら貸してください」と頼んだ。

老婆は快く、鋏を持ち出し、

「これは竜のもので。持って行って山を掘るのに使いなさい。役に立つでしょう」

大尖哥と水社姐は受け取って老婆に別れを告げ、洞窟を出て阿里山に向かった。

阿里山の麓まで来ると、大尖哥は大きな枝を伐って地面を深く突いた。水社姐は鋏で土を掘り起こした。どれだけ掘り続けたら。深い洞窟を掘り当てた。突然“ゴー”という音を上げると、洞窟は赤い光りを放ち、金の斧と金の鋏が現れた。若い夫婦は大喜び。大尖哥は金の斧を取り上げ、水社姐は金の鋏を持って二匹の竜の住む池まで一気に駆けつけた。雄雌の竜は池の中を行ったり来たり、太陽と月を吐き出したり飲み込んだりして遊んでいる。大尖哥は池の傍の大きな岩の上に立ち、金の斧を池に投げ入れた。ゴロゴロという音がしたかと思うと、二匹の竜は池の底を転げまわり、高い波しぶきを上げた。二匹の竜は血だらけになった頭を上げて、空中に逃げ去ろうとした。水社姐が急いで金の鋏を池に投げ入れると、チョン、チョンという音と共に竜の頭が池に沈み、池の水は静けさを取り戻した。二匹の竜は池の底に横たわり、池の水を真っ赤に染めた。

金の斧と金の鋏は、水の中でキラリと光ったと思うと、瞬く間に見えなくなった。太陽と月が竜の口か





「日月潭」の景観(ウイキペディアより)

ら吐き出され、池に浮き上がった。大尖哥と水社姐は池の縁の大きな岩に立ち、拍手して互いに喜び合った。大尖哥が言った、

「悪者の竜をやっつけた。でも太陽と月はまだ池の中だ。これじゃ何にもならない。どうしたら元通り天空から輝かせることができるだろう？」

しかし池の水を見つめるばかりで良い方法が浮かばない。その時、水社姐が言った、

「やっぱりあのお婆さんに相談してみましようよ」

二人は大きな岩の下の深い洞窟に老婆を訪ねた。老婆は白髪をなびかせながら、いつものように食事の用意をしていた。大尖哥が傍に寄って、

「お婆ちゃん、悪い竜を退治したよ。出て来て！」

老婆は竜を退治したと聞き、嬉し涙を流し、声を震わせて、

「お若い方、本当にいいことをしてくれました。私も外へ出て見せてもらいましょう」

老婆と若い夫婦は池の傍の大きい岩に立って池を覗き込んだ。太陽と月が池の中を浮き沈みしている。

大尖哥が、

「お婆ちゃん、どうしたら太陽や月を空へ戻すことができるでしょう？」と訊いた。

老婆はちょっと考えて、

「先輩の人たちから聞いた話だが、竜の目玉を食べると、全身に力が満ちて強くなると言います。まず行って竜の目玉を食べ、それから太陽や月を空へ放り上げたらどうだろう？」

彼らはこれを聞いて池に飛び込み、まず大尖哥が雄竜の目玉を取って、一口に飲み込んだ。続いて水社姐も雌竜の目玉をつまんで飲むと、二人は急に背丈が伸び、体も大きく逞しくなって、池の傍に立った彼らは二つの山のように見えた。

二人は手に太陽を抱えて空に放り上げた。しかし、太陽は中空を舞ったと思うとまた池に落ちて来た。三度投げ上げても、三度ともに落ちて来る。老婆は、「池の縁に大きな棕櫚の木がある。それを抜いて太陽を持ち上げてごらん」と言った。

二人がそれぞれ大きな棕櫚の木を抜いて太陽を持ち上げ、下から突き上げた。こうして三日三晩、奮闘を続け、太陽を空へ戻すことができた。太陽は以前と同じように真っ赤に燃えて天空を照らした。

地上の草花は生き返り、人々の顔に笑みが戻った。次に夫婦は月を持ち上げて力いっぱい空に放り上げた。棕櫚の枝に支えられ押し上げられた月も、天空に戻って行った。太陽が西へ落ちて行く頃、月は天空に昇った。

人々は手を叩き、歌い、踊って、太陽と月を歓迎した。大尖哥と水社姐は手に棕櫚の木を持って、すくと池の両端に立った。大尖哥は仰向いて空を眺め、水社姐は俯いて池を眺めた。老婆は大尖哥に、

「悪い竜は退治された。太陽も月も天に帰った。私たちも家に帰りましょう」

大尖哥は、

「私は太陽と月がまた池に落ちないように見守らねばならない。太陽や月が永遠に明るく輝き、人々が楽しく生活できるように見守りたい」

老婆は、次に水社姐に、

「水社姐、悪い竜は退治された。太陽と月はもう空へ昇った。私たちも家へ帰りましょう」。

しかし水社姐も、

「私は悪い竜がまた悪さをせぬように監視しなければなりません。太陽や月がいつも空から明るく照らしてくれるように、人々が楽しく生活できるようにしたいのです」

老婆はこれを聞いて、

「あなた方は本当によい若者だ」と言いながら白髪をなびかせて独り家に帰って行った。

大尖哥と水社姐はしっかり池を監視した。数日が過ぎ、数カ月が過ぎ、歳月が過ぎて行った。

大尖哥と水社姐は二つの大きな山となって、末永く池を見守るようになった。人々は池を日月潭と呼び、二つの大きな山を大尖山、水社山と呼んだ。

(肖甘牛、潘平元 整理『台湾民間伝説』より)

# 心の復興者・二宮尊徳(1)

和田 宏

## 〈二宮金次郎の石像〉

二宮金次郎のち尊徳（1787年7月～1856年10月享年69）は、江戸時代後半期に、神奈川県小田原市で、父・利右衛門と母・よし、の長男として生を受けた農民であり、農民と共に生き、農民のために一生を捧げた。

小田急線の「栢山駅」近くに生家が残されており、傍に尊徳記念館もある。幼少名を金次郎と名乗った彼は、薪を背中に背負い、歩きながら中国の史書五経を読む姿の石像が、昔は多くの小学校にも建てられていた。私は目黒区碑文谷にある区立碑いしづみ小学校を卒業したが、校庭には現在も金次郎の石像がある。

## 〈極貧の中で母も失う〉

幼い金次郎は、昼間の農作業のあと、夜は草鞋わらじを縫って家計を助け、親孝行者の手本のように言われている。当時の農村では山に入って木を伐り、薪を作ったり、草鞋を作ったりして家の手伝いをしたなどという事は、どこの農家の子供もしていた筈である。つまり子供の時の金次郎が強調され過ぎるあまり、大人になってからの尊徳がどんなことをしたのか、あまり知られていない。

金次郎が幼い頃、味わった苦しい経験は、酒匂川の氾濫で何度も自家の田畑が流されことなど山ほどあるが、中でも私が実に悲しい話だと思うものが2つある。それは、正月に太神楽が村の各家に回って来た際、渡す祝儀1文さえもなく、7歳の金次郎が、4歳の弟・友吉の口を押え、親子がじっと息を殺して居留守を使い、太神楽の行き過ぎるのを待ったという事と、母・よしの父親が亡くなった時、喪服もなく、よしが近所を駆け回って白い布を借り集め、一晩かけて縫い上げたものの、つぎはぎだらけだらけの服だったため、葬儀に出掛けて行った実家で、よしの兄から、“親類の前で俺に恥をかかせる気か！”と言われ、金次郎ら母子4人（よし35歳、金次郎14歳、友吉11歳、富次郎2歳）は、寒い暗い土間に控えさせられたまま、実父との最後の対面も、野辺送りの見送り



小学校の校庭にある「金次郎像」の前で

さえも許されなかったという。

家に戻って来た母・よしは、“貧乏が悔しいー！”と10日間悔しがった末、嘆きの余り、“憤死”したという事の2つである。

## 〈多発していた百姓一揆〉

江戸時代の後半になると、全国的に農村が徐々に荒廃し、農地の生産力が低下した。それでも、幕府や各藩の為政者は、質素儉約令を出すだけで、決められた年貢米（税）を厳しく取り立て続けた。このため、日本各地の農村は、ますます疲弊し、子殺し、姥捨て、流民となって、農村人口は減り、農民たちは、「米を作っても、どうせお上（かみ）が取ってしまうだけだ」と自暴自棄になって、朝から酒を飲み、博打を打ち、働かなくなった。

一方では、追い詰められた農民たちは、「百姓一揆」を起こさざるを得なかった。江戸時代を通じて3200件の百姓一揆はあったが、勘定奉行の神尾春央かんおほるひでが“胡麻の油と百姓は絞れば絞るほど出るものなり”と放言した、8代将軍吉宗の享保年間（1716～1736年）から特に増加し、天災飢饉と符合するように天明、天保、幕末の慶応年間に多発している。

## 〈自力更生と積小為大〉

金次郎の父・利右衛門は、人助けの好きな心根の優しい人で読書家だった。しかし金次郎が13歳の時に47歳で亡くなり、また既述のとおり、14歳の時に母・よしは35歳で亡くなっている。



両親を相次いで失った14歳の金次郎、11歳の友吉、2歳の富次郎の3兄弟は離散し、金次郎は、父の兄・万兵衛の家に引き取られ、弟2人は母の実家に引き取られた。父譲りの読書家の金次郎が夜、行燈の明かりで、『大学』を読んでいたら、万兵衛から“行燈の油がもったいない。百姓に学問は要らない”と叱られた。金次郎は、近所から貰った5勺の菜種を荒地に植えて7升を実らせ、菜種油を使って自力で行燈を灯すことが出来るようになり、読書を再開した。

『<sup>せきしょうだい</sup>積小為大』の真理と『自力更生』の精神を自ら実践したのであった。「積小為大」は尊徳の言葉として伝えられており、「小さい事が積み重なって大きな事になるから、小さい事をおろそかにしてはいけない」という意味である)

荒地に稲を植えて米も収穫した。金次郎は、19歳で廃屋同然になっていた生家に戻って再興し、20代半ばで祖父の時代に匹敵する2町歩の田畑を買い戻し、31歳の時には、栢山村一番の4町歩(4万平方メートル)余りの地主になったのである。

#### 〈日本最初の民主主義者〉

この一家再興の功により、31歳の金次郎は小田原藩主から表彰され、褒美として鋤を貰い、1818年、小田原藩家老の服部家の財政再建を頼まれる。家老から一農民にお家の全権を任せられると言う、極めて異例のことが起きた訳だが、金次郎は服部家の家事の一切の権限を自分に委譲させて、家老に口出しさせなかった。そして数年でお家再興を軌道に乗せることに成功した。

金次郎の手柄は、もう一つある。1820年、33歳の時、年貢米を正確に測る「枡」を小田原藩に提案して採用されている。1斗枡を改良し、藩内で統一規格化させた。これによって、大きさがまちまちだった枡によって、お米を余分に取られることもなくなり、農民たちは、大変喜んだ。

小田原藩の藩主の大久保忠真から手腕を見込まれた金次郎は、1822(文政5)年、今の栃木県真岡市にある藩主の分家の宇津家桜町藩の再興を頼まれる。桜町藩の石高は4000石であった。

石高は、江戸幕府が始まった17世紀初頭に決められたもので、200年余り経った江戸末期には、天候の不順や農村の疲弊などから農作物が育たず、実際の

米の収穫量は1000石、4分の1に減っていた。年貢(税金)は、石高の40%を取り立てていたので、石高4000石の桜町藩は1600石となった訳だ。

立て直しの依頼を固辞していた金次郎は、過去100年間の年貢を調べた結果、年貢を半分の800石にする条件なら、引き受けると言ったのである。

たとえ、石高が実情に合っていないとしても、大名たちの格付けである以上、認める訳には行かない。従って、この条件は大袈裟に言えば、幕藩体制の根底を揺るがすような提言を意味するが、それを金次郎は飲ませたのである。

それでも藩主側からすれば、400石(4斗の米俵で1000俵)足らずだった年貢米の倍増を意味し、農民にすれば頑張って生産を挙げることが出来た暁には、それ以上の年貢は取り上げられないという希望が出て来る。

1823年36歳で、金次郎は小田原藩から武士に取り立てられ、尊徳となり、真岡市の桜町領の立て直しに取り掛かる。生まれ育った小田原栢山の自宅や田畑を売り払い、一家揃って真岡市の桜町藩陣屋に赴いた。先頭に立って用水路や堰や橋の改修を行った。

「廻村」といって、毎日、村の1軒1軒を廻って、様々なことを尋ね訊いては、助言をして励ましたり、「出精の者」を、農民同士の自由な投票で互いに選出させたりして、篤農家に鋤や鎌などを褒美として与えた。尊徳は、「芋こじ」と名付けて、農民同士の話し合いを頻繁に持ち、村の問題を協議したり、村長を投票で決めたりしたが、その際、女性にも投票権を認めた。

封建時代の農村では、前代未聞の“民主主義的な”やり方である。明治時代の内村鑑三は、英文の著書『Representative men of Japan(代表的日本人)』の中で、二宮尊徳を“農民聖人”として取り上げている。

太平洋戦争の末期に、本土空襲したアメリカ軍のB29爆撃機から、「民主社会の建設のため生涯を捧げた民主主義の先駆者二宮尊徳に学べ」、「真の平和主義を実践した偉人二宮尊徳を忘れるな」などの文言が、彼の肖像と共に印刷されたビラがばら撒かれたことを、「わんりい」読者の皆さんはご存知だろうか!?

(つづく)

去る 9 月から 10 月にかけて幾つかの Internet News の中で「当地では 7 月から外国人の管理が厳しくなってスマホで電子決済できなくなった」の記載が見られました。この言い方ですと誤解されますので正確な状況を下記に説明します。

7 月末頃から当地でメジャーなスマホ電子決済 APP の一つ「微信支付(WeChat-Pay)」で外国人が認証されず使えなくなりました。しかしもう一つのメジャーな「支付宝(アリハバ系)」は使えました。私が微信のバグを疑って電腦系統(computer system)担当窓口へ問合せた8月中旬時点で窓口はバグだと認識していて「2 週間待て」と言いましたが、実際使えるようになったのは其れから 1 か月後の 9 月後半でした。10 億人が使う APP では外国人の割合は殆ど無視できる位で、且つ代替え(支付宝)が有りますので、影響の大小から見れば対応が遅くなくても止むを得ないと思います。しかし 2021 年の「わんりい 4 月号：四姑娘山・写真だより No.48『健康コード取得騒動記』」でご紹介しましたように、新型コロナ対応の健康コード APP のバグ(入国時の旅券番号がその後書換えられた場合に健康コード電腦系統が受け付けない稀なケース)が 2 日間で修正された疾速な対応ぶりに驚き感心していましたので、「これが普通かな」とは思いながらも今回の微信のバグ対応にガッカリした次第です。

もう一つ「ガッカリした」電子決済の話をご紹介します。最近半年ぶりに成都の市内循環バスの 341 路に乗った時、私は以前と同じ様に「微信支付」で運賃を支払おうとした所、運転手から

「微信支付は使えなくなった、支付宝を使え」と言われました。以前のバス運賃の電子決済は市場等で買い物する時と共通な画面で同じ様に 2~3 箇所タッチ操作して金額・パスワード入力しますので「良く出来ている」と感心していましたが、この時に指示された「支付宝」の画面は全く異なる公共バス専用で且つ 5~6 箇所のタッチ操作が必要なので私は金額・パスワード入力の画面に辿り着けず、止む無く運転手にスマホを渡して助けを求めました。運転手は迷惑そうにしながらもスマホを操作してくれましたが、運転の隙間に操作するとは言え赤信号待ち 1 回とバス停乗降車 2 回を経てやっとバス運賃 2 元=約 40 円を支払えました(運転手の親切に感謝!)

私は当地の電子決済に感心していたのですが、運転手でさえ瞬時に操作できなくなった事にガッカリしました。バス会社には色々な事情が有って操作方法を変えたのでしょうから此れは此れで構わないと思ったのですが、問題はバスの乗車口に頑張っていた怪しげな小父さんです。この小父さんは操作指導員の恰好をしている訳でもなく、目をギラギラさせ親切顔で「操作してやる」と言って困っている私のスマホに手を伸ばしました。当地のスマホは何でも出来ますので私が用心して小父さんにスマホを渡さず運転手に操作を頼み込んでいる間も、この小父さんは「操作してやる」と繰り返して言いました。運転手が運賃を支払い終えて私がバスの中の方へ移動して幾つかバス停を過ぎて降りる迄の間も、この小父さんは乗車する客が運賃を支払う様子を見ながらバスの乗車口で頑張っていましたので、単なる親切では無くバス運賃支払いに困る乗客を鴨にして何か企んでいると勘繰りました。

繰り返しになりますが、当地のスマホは何でも出来、且つ急速に色々な手続きがスマホ操作に置き換わっていますので、皆さんが当地をご旅行される時はお気を付けください。



微信支付 (WeChat-Pay)  
「上海熱線」から

支付宝「財經头条から」



## 舞台の上からボイストレーニング

国際ボランティア祭り「夢広場」は今年第25回を迎え、11月23日に町田市民フォーラムで記念ステージが催されました。今年は25周年ということで、初めて物販とパフォーマンスを分けて行い、「わんりい」は物販には参加しませんでした。ステージでは、例年のようにボイストレーニング講座の講師 Emme さんをお願いして、ボイストレーニングのデモンストレーションを実施していただきました。

Emme さんの澁刺としたご指導のもと、立ち上がって軽いストレッチで身体をほぐした後、お腹の筋肉を使って声を出すということを習い、お腹の底から大声で笑ったり、唇を縦・横にしっかり動かして滑舌の練習をしたり、普段の生活では出さないような声をしっかり出してボイストレーニングを楽しみました。最後に皆さん一緒に「赤とんぼ」を高らかに歌って終了しました。

ボイストレーニングは未経験の方が殆どでしたが、皆さんには楽しい時間を過ごして頂きました。何人かの参加者に伺うと、身体がぼかぼかとして来て、思いがけず軽く、心地よい疲労感も感じて、「病みつきになりそう」と仰る方もいらっしゃいました。

ボイストレーニングに興味を持たれた方は、わんりい最終ペーにご案内の火曜日講習会にお出かけください。楽しい時間が待っています。

(鈴木 千佳子)



## お詫びと訂正

わんりいは11月号で、中国四川省在住の大川健三さんに、四川省の近況報告をして頂き、大川さんがコロナに罹られて、療養生活を体験されたお話がありました。

その中で、「更に成都で2か月間、大学病院に検査入院をして、やっと自宅に戻り、静養することにしました」という部分がありますが、この部分、編集担当者の思い違いと、確認不足で、大川さんの原稿の主旨と違ってしまいました。

大川さんの原稿は、「その後、成都で2か月間、大学病院で精密検査したり自宅で静養したりしました」というものでした。

大川さんに確認をする段階で不備がありました。大川さんには、折角のお話の趣旨を曲げてしまい、大変失礼いたしました。また、皆様には、大川さんのお話を正確にお伝えすることが出来ず、申し訳ありませんでした。

### ◇満柏画伯の漢訳俳句◇

旅に病んで  
夢は枯れ野を  
かけめぐる

松尾芭蕉

lǚ tú bìng mèng zhōng  
旅途病梦中

kū yě rèn wǒ xíng  
枯野任我行

【わんりいの催し】  
皆様のご参加を歓迎します

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体の力を抜いて気持ちよく発声しよう！  
声は健康のバロメーター！！

\*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館 美術工芸室
- 日時：12月19日（火）10：00～11：30  
'24・1月23日（火）10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

*** 中国語で読む 漢詩の会 ***

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時：12月10日（日）10：00～11：30
2024年1月、2月 休 講
- 講師：植田渥雄先生
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）

Email:ukiuki65jpjp@yahoo.co.jp
(有為楠)



■12月・'24.1月定例会 代表宅

- ▼12月7日（木） 13：45～
- ▼'24年1月11日（木） 13：45～

■'わんりい' 発送 三輪センター

- ▼'24年1月号 12月28日（木）
- ▼ 2月号 休刊

☆☆ 編集後記 ☆☆

今年は、熊との遭遇事故が多発しました。今までは、熊が冬眠前に沢山の食糧を必要とする時、山村の過疎化で、庭の果樹などの手入れが行き届かず、その果実を目当てに熊が里に下りて来ると言われ、熊が冬眠に入れば、騒ぎは落ち着くと言われていました。

しかし今年はちょっと様子が違うようです。地球温暖化のせいで、熊が冬眠の準備をしなくなったとか、山の木の実が極端に不作で、熊の食糧が無いせいだと言われています。

テレビを見ていて、二つ気になることがありました。一つは、熊と遭遇してつかみ合いをして撃退した方が、相手の熊は異常に痩せていたと話していたこと。もう一つは、北海道で、川を挟んで撮影された熊の姿が、痩せて、毛並みに張り艶が無かったことです。

地球の温暖化は、地球上のすべての生き物に大きな影響を与え、その生存を危うくするのだと、改めて強く感じた出来事でした。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい 10月以降の入会は、当年度会費 1000円

■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりい’ 289号の主な目次

|                                           |    |
|-------------------------------------------|----|
| 寺子屋 四字成語(68)『偷梁換柱』……………                   | 2  |
| 「日译诗词」(37) 李清照<br>『点絳唇』(寂寞深閨)……………        | 3  |
| 「中原雑感」(37) 開封・菊花文化節……………                  | 4  |
| 古代中国の風流逸話「世説新語」(2)……………                   | 6  |
| 「避暑山荘・外八廟」駆け足旅行(8)……………                   | 8  |
| 日月潭(2)……………                               | 10 |
| 心の復興者・二宮尊徳(1)……………                        | 12 |
| 四川省・大川さんの近況報告<br>WeChat Payで外国人身分証確認トラブル… | 14 |
| みんなの広場……………                               | 15 |
| ‘わんりい’の催し・お知らせ……………                       | 16 |